
愛ではないから。

zecczec

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛ではないから。

【Nコード】

N8421E

【作者名】

zecczec

【あらすじ】

幼なじみの杏子の引越しが終わった。杏子と俺とほたるの3人は同じ長屋で仲良く育ち、お互いの部屋はベランダを通じて行き来ができていた。杏子のいなくなった部屋で、俺は男遊びが派手だった杏子を思い出す。そこに真面目がウリのような女のほたるがやってきて……。当作品、R15となっております。15才未満の方、そして性表現が嫌いな方は読まないで下さい。

(前書き)

幼なじみを題材にした初体験の物語です。

当作品、R15となっておりまして、15才未満の方、そして性表
現が嫌いな方は読まないで下さい。

俺の部屋と同じ形をした杏子の部屋は、がらんとしていて、静かだった。

「杏ちゃんの引っ越し、あつという間だったね」

俺の隣に、ほたるがやって来て言った。

俺と杏子とほたるの三人は同じ歳の幼なじみだった。いや、父親が同じ会社に勤めていて3件長屋の社宅に住んでいたから、幼なじみというよりもっと濃いつきあいだった。

2階の4畳半の部屋は、それぞれの家庭の一人っ子にあてがわれた。

ベランダの防火壁は、はるか昔の火事騒ぎの時に外してしまい、いつか修理しなきゃと言いながらそのままだった。だから俺達はベランダごしにお互いの部屋を行き来できた。

赤ん坊の頃からずっと一緒に育った俺ら。

ただ、成長のスピードが、微妙に違った。

杏子。成長が早く、体つきが大人になるのも早くて、マセていて、エロかった。

あいつの提案で、小学1年のころ、3人でお医者さんごっこをし

て遊んだ。

特別いやらしい意味で遊んだ訳じゃないけど、今考えると服を脱げだのなんだのと、そんな遊びをやりたがる杏子は本質的にエロかったんだと思う。

ただ、その遊びをしている所を両親に見つかって、俺達3人はしこたま怒られた。

俺は多分、それがトラウマになったんだろう　と、思っていた。

ほたる。　杏子とは違って、体つきは今だに細い。　気が弱い優等生タイプで、アニメ好き。　漫画クラブに入っていて、良くも悪くも、みんなにとけ込む、つまりは存在感のない女。

女フェロモンを小坊の頃から出しまくってクラスの女子といつてもモめていた杏子とは正反対だったけど、二人は仲が良かった。

ほたるも同人誌とやらで男と男が裸で絡み合う漫画を描いていたから、エロ仲好しだったんだろうか。　杏子が俺の部屋に飛び込んできて同人誌をつきつけ、男の体を描きたいからほたるのためにも脱いで見せると真面目な顔で言われて焦ったのも、……ヘンな思い出だ。

俺は杏子のいなくなった、そのがらんとした部屋の真ん中に腰を下ろした。

俺の部屋と同じ形。　窓も、壁の色も、天井も……。

でも、ここは俺じゃなく、杏子が確かに座っていた場所。

そして、杏子が沢山の男を連れ込んでセックスしていた場所。

杏子は小学6年頃から休みの日にはあちこちに遊びにいき、中学生になると親がパートでいない時に高校生や大学生の彼氏を連れ込んでここでセックスしまくっていた。

俺の部屋は壁一枚隔てた隣の部屋。そしてこのボロい長屋。当然物音は響く。

だけど俺は最初全然気がつかなかった。それだけガキだったこともあるし、まさか自分と同じ歳の奴が真っ昼間からやってるなんて、漫画の中であまりえない出来事と思っていたから。

杏子の部屋の扉が閉まる振動が俺の部屋に伝わる。

そして急に杏子の部屋で流れていたロックのBGMのボリュームが上がる。

そして急に静かになる。

男が帰った後、杏子はたいてい8*4をふりかけまくって、俺やほたるの部屋に遊びに来た。

あるとき何気なく壁に耳をつけてみたときに、初めて聞こえた杏子のあえぎ声。

あの時のショックは何なんだろう。

それはきつと今まで気づかなかった自分への恥ずかしさ。そして、興奮。

その後も平気な顔をして部屋に遊びに来る杏子。

ハーパンとノーブラだったり、ありえない格好の杏子。

親か本人に注意をしようかと思ったこともある。 けど小さい頃のお医者さんごっこがバレた時のように、本気で親がうるたえたらと思うとなぜか怖くて俺は見えて見ぬふりをした。

「杏ちゃんの引越し、決まったのって梅雨時期なんだって。 おじさんが転職決めたから、社宅にはいられないからだって」

ほたるが俺の隣に座った。

蒸し暑いこの時期は、ほたるの甘い汗の香りを微かに俺に振りかけた。

「杏ちゃん、大胆だったよね」

ほたるが小さく笑った。

「私達の前で、抱きたければ抱けばいいじゃない、って言うんだもん」

「あー、あの時な」

俺はやっと返事をした。

その日、ほたるが俺の部屋に遊びに来ているにもかかわらず、杏子は隣の自分の部屋でこともあろうか、一人エッチをしはじめたのだ。

その声が、部屋に響く。

ほたるという”女の子”と一緒にいた俺は、やり場に困り壁を思いきり叩いたのだ。

静かになったのでやれやれと思ったのもつかの間、杏子は堂々と俺達の部屋に乗り込んで来た。

そして言った言葉が。

「あいつ、いきなり俺の部屋にきて、”アタシを抱きたいんでしょ？”だもんなあ」

「そうそう」

ほたるが苦笑する。

「そこで、”誰がお前なんか抱きたいって思うか、ボケ”なんて言うから、杏ちゃん逆に怒っちゃってね」

今思い出しても、最悪の口論だった。

杏子はかなりムキになって俺にくっついてかかった。

自分はいつもと同じようにしか、やってない。

なのに、今日だけ注意するなんておかしくない？

それっていつもは聞こえてるけど黙ってるって証拠でしょ？
アタシを抱きたいんでしょ？

抱きたいなら抱けばいいじゃない、
私は構わないよ、ほたるちゃんが証人だから！

俺は思い出して、軽く笑う。

「ほたるが証人って、そりゃなんだよって感じだよな」

俺が笑い飛ばすが、ほたるは少しうつむく。

「抱くって簡単に言うけどな、あいつを抱いたのがオヤジ達にばれたら、どんなにみんなが悲しむかって分かってねえんだよな」

俺は杏子に言った台詞を内容そのままを言った。

「俺達、まだ中坊だけ？ もしも妊娠でもしたり、セックスしてるのが親にばれたら、どーするんだっつーの」

俺はそう言っでごろんと横になった。

そう。俺達にまだセックスは早い。

だが、ほたるは黙っていた。

「ほたる？」

俺が声をかけると、ほたるが小さくつぶやいた。

「杏ちゃんが言っただとおりの、自分がどうしたいか、じゃなくて、

周りがどう思うか、で責任転嫁しちゃうんだね」

「責任転嫁……って、ほたる、お前まで杏子と同じこと言うのか？」

俺は少し怒りながらほたるの手首をつかんだ。

ほたるはゆっくり俺の方を向く。

「抱いて欲しかったんだよ、杏ちゃん。だからわざと、私のいる前であんな事したの。杏ちゃんが、君のこと好きだって、気づいてた？」

俺は言葉を失った。あいつが俺を好き？ 男を引き込んでセックス三昧のあいつが？

「抱いてほしかったんだって」

「ちよ、待てよ、ほたる。抱いてほしいなんて、中坊の台詞じゃねえよ」

「杏ちゃんは本気でそう思ったよ。好きだから、抱いてほしいって。でも、君には全然その気が無いって。夜ばいされもいいのに、なんて言ってる。ずっと待ってたの。ずっと誘惑してたんだよ、杏ちゃんってば」

ほたるが寂しげに言った。

誘惑？ あいつが男と隣の部屋でセックスするのが俺に対する誘惑だって？

ありえない。

「引っ越しが決まった時、杏ちゃんに頼まれたの。自分が隣の部屋で一人エッチするから反応を確かめてみて、って。杏ちゃんのシナリオでは、知らない振りをして、その後私が帰ったらきつと自分の部屋に来てエッチしてくれるんじゃないか、って事だったけど」

ありえない。

「不器用よね？」

ありえない。

「もし親にばれても、誘ったのは杏ちゃんからだって証言してよ、ってお願いされたんだから、私」

ほたるが苦笑する。

その時、俺の携帯がブルルと小さく振動した。

メールだ。

俺は黙ってメールを開く。

杏子からだ。

「なんて？」

「……童貞捨てる気になったら、いつでもメールくれって……」

「あは。杏ちゃんらしいメールだね」

ありえない。

でも、杏子みたいに沢山の男とセックスしてるのなら、こいつにとってこの誘い方は普通なのか？

俺がまだ、ガキすぎるのか？

セックスすることなんて、そんなに簡単な事なのか？

俺のぐちゃぐちゃの頭の中を表現するかのように、セミの鳴き声が耳につく。

蝉の声と、疲れた夕暮れと、杏子の部屋のぬるい空気。

「ここで、しよっか。……私も初めてだよ？」

ほたるの声が妙にすつきりと胸に届いた。

俺はほたるを見た。

ほたるは落ち着いていた。

「最初の相手が、幼なじみって、大人になってから胸はれるでしょ？」

ほたるが部屋の天井を見上げる。

「ここで、初めてを、杏ちゃんに捧げよう？」

ほたるはゆっくりと畳に寝転がった。

俺はゆっくりとほたるの上にまたがり、ほたるにキスをした。

ファーストキスだった。

でも、心臓は怖いくらいに落ち着いていた。

何も分からぬまま、俺はほたるの体中をいじり、セックスをした。

何も分からぬまま、ほたるは俺の体中をいじり、卑猥な言葉を吐き、セックスをした。

お互いになになったり下になったりしながら、時々天井や壁に視線を向ける。

きつと杏子もセックスしながら見た景色。

俺とほたるの汗と呼吸が混じり合う。

俺達は初めてのくせに、ただ没頭した。

セックスなんて、簡単なことだった。

なのに俺はどうして杏子を抱けなかったのだろうか。

どうしてほたるなら、抱けるのだろうか。

ほたるの中に体を突き立てながら俺はただ杏子のことを考えてい

た。

俺とほたるは、これから何度も何度もセックスするのだろう。

杏子の部屋で、セックスするのだろう。

ほたるがアニメのキャラクターの名前を呼びながら足をひくつかせた。

それでよかった。

俺達のは、愛ではないから。

(後書き)

短編を書くのがとても苦手なので、練習を兼ねて書いてみました。
読んだ後に微妙にブルーになるような小説を書いてみたかったの
ですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8421e/>

愛ではないから。

2010年10月28日05時11分発行